2019 年 4-6 月

20190405
元号雑感。
（その 1）。ときおり見受ける見解として、「いわゆる西暦なるものもキリスト教起源という特殊な文化に基づいたものであって、人類普遍の原則というわけではないのだから、これに従う必要はない」というものがある。それはその通りである（おそらく、日頃西暦を主に使う人の多くは、とりたてて「西暦が人類普遍の原則だ」と考えているわけではなく、ただ単に「現在の世界で（非キリスト教圏を含む）相対多数の人たちによって使われているから、それにならうのが便宜だ」と考えているに過ぎないだろう）。私の乏しい知識の範囲内でも、西暦以外にイスラーム暦とか中華民国暦といった暦がある。ただ、それらは、いったんある年を「元年」として覚えれば、それ以外の年は単純な足し算・引き算だけで決まるから、他の暦との換算は比較的簡単である。それに対し、元号表記は数十年ごとに、その都度「元年」になって数え直す方式だから、他の暦との換算が大変煩わしい（その点で言えば、西暦 1940 年を皇紀 2600 年とする暦の方がまだしも簡明である）。こういう元号方式はもともと中国で生まれ、その影響で周辺諸国に広まったらしい。今回の新元号が国書由来か漢籍由来かということが盛んに取り沙汰されているが、そもそも元号制度そのものが中国由来だということはあまり指摘されていないようだ。
（その 2）。かつて元号法が制定されたとき、東京大学法学部教授会は、「今後、学部内での文書は西暦表記を原則とする。文部省（後の文科省）に提出する文書については、事務レヴェルで機械的に対処する」という決定を採択した。この決定は、採択時の教授会メンバーが多数残っているあいだは遵守されていたが、次第に世代交代が進むにつれて、なし崩しになった。最近では、公費出張の申請書を作成するときに、事務で準備したエクセルの書式に日付を西暦で書き込むと、エンターキーを押した瞬間に「平成〇〇年」と変換されるようになった。文科省→大学本部→学部事務という線で降りてくる行政的圧力の方が教授会決定よりも強いということだろうか。

20190415
4 月 8 日の書き込みで上野千鶴子のことについて触れたが〔ここでは省略〕、その少し後に東大の入学式で彼女が述べた祝辞が多くの人の注目を集めている。FB 上でもたくさんの書き込みがある。全体的動向はともかく、私の FB 友達の範囲内でいうと、大多数はこの祝辞に強い共感を寄せ、ごく一部に、共感を踏まえつつも小さな違和感を表明するものがあった。私自身、、彼女に対して基本的共感と小さな違和感の両面をいだいてきたが、今回の祝辞について感じた小さな違和感は、これまで私の目に触れた上野批判とは異なったところがある。
第１に、何よりも気になったのは、彼女がアカデミック・ガウンを着て登壇したという点である（私の連れ合いはテレビを見て、「ふーん。上野千鶴子があんな趣味の悪いガウンを着るんだ」と驚いていた）。ガウン制定時には導入消極論も少なくなかったが、大学執行部は、「留学生の間でこういうものへの要望が強い。欧米の大学に対抗して留学生を集

めるためには導入が不可欠だ」という理屈で消極論を押しきったというのが私の記憶である。その後、私自身は幸いにしてガウンを着ねばならないような式典に列席したことがないので、ドレスコードがどのくらい厳しいのかは分からないが、現役の学部長か何かならやむを得ないにしても､既に退職して外部の人間となった人が来賓として呼ばれたのなら、あえて着ないという選択もあったのではないだろうか（たとえ「是非、着てください」と言われても、上野のような人なら、「そう言われても、厭なものは厭です」と言ってもおかしくないような気がする）。これでは、就活学生がみんな同じようなリクルート・スーツを着るとか、最近では入学式でも同様の黒のスーツばかりといった状態を批判できないのではなかろうか。

第２点。内容については、多くの部分に私も共鳴する。特に、「頑張ったら報われるとあなたがたが思えることそのものが、あなたがたの努力の成果〔だけ〕ではなく、環境のおかげだったことを忘れないようにしてください」という個所には「超いいね」を付けたい。その上で、ほとんど唯一私が引っかかったのは、「これから 4 年間すばらしい教育学習環境があなたたちを待っています。そのすばらしさは、ここで教えた経験のある私が請け合います」という個所である。私は長いこと、上野千鶴子が東大にいることの意義は、よかれ悪しかれエスタブリッシュメントを代表している大学の中で異分子であり続ける点にあると思ってきた（そして、彼女よりもはるかに知名度の低い私ももう一人の異分子だと思い続けてきた）。しかし、この「私が請け合います」という表現は、彼女がメインストリームを代表することにあまり違和感をいだいていないことを物語るように思えてならない。ひょっとしたら、アカデミック・ガウンを着ることに抵抗がないのも、同じことのあらわれなのだろうか。

こんなことを考えているうちに、『現代思想』2011 年 12 月臨時増刊号（総特集・上野千鶴子）に収録された宮地尚子との対談のことを思い出した（ついでながら、この特集は上野が東大を早期退職した少し後に出たものだが、50 人近い論者が登場して、実に壮観である。このような総力特集が組まれるということ自体、既に彼女が日本社会でメインストリームの人となっていたことを物語るように思える。今回、久しぶりに本棚からこの号を取り出してパラパラとめくったところ、面白い個所が多すぎて、読むのをやめるのに骨が折れた）。

この対談の相手となっている宮地尚子という人は、私はよく知らないが（専門は「文化精神医学」となっており、一橋大学社会学部教授らしい）、上野と多くのものを共有しつつも、考えが違う点は違うと明言して、丁々発止と火花を散らす対談である。あちこちに目を引く個所があるが、今回の入学式祝辞との関係で一個所だけ引用するなら、「「弱さを認める強さ」とか、「卑怯者である勇気」というと、男には届かないんですよ」という発言がある。これは今回の祝辞における「強がらず、自分の弱さを認め、支え合って生きてください。……フェミニズムはけっして女も男のようにふるまいたいとか、弱者が強者になりたいという思想ではありません。フェミニズムは弱者が弱者のままで尊重されることを求める思想です」という個所とつながっている。

この言葉の内容には共鳴するものがあるが、「男には届かないんですよ」という言い方は、せめて「多数派の男には」と言ってほしかったという気がする。実は、この対談よりも 10 年前に、立岩真也が『弱くある自由へ』という本を出している（青土社、2000 年）。上野

は立岩のことをよく知っているはずだが（多分、立岩は上野の弟子の一人）、この発言をしたとき立岩の著作が頭をよぎらなかったのだろうか。私自身は、上野との直接の接触は僅少だが、数少ないメールのやりとりのなかで、自分の弱さとか臆病さということについて（善し悪しを離れた単純な事実として）触れたところ、「あなたのように自分の弱さを認める男性は稀有です」という返信があった。「稀有」という言葉にはほめるニュアンスがあるが、同時に、例外であり、だから通常はそういう存在は無視してもよいのだという含意がありはしないかという気もする。

20190425

数日前に NHK 教育テレビで「連合赤軍　終わりなき旅」という番組が放映されたようで、それに関連して FB 上でも何人かの人が長めの感想や批評を書き込んでいる。私はその番組を見なかったし、この問題について論評めいたことを語ること自体にあまり気が進まない。ただ、どうしてそう感じるのかということについて、簡単に書いてみたい。

あの事件当時の私の受け止め方としては、「あんな連中とわれわれはまるで違うんだ」という気分が強かった（ここで「われわれ」という一人称複数はどういう意味かという問題もあるが、今は立ち入らない）。「まるで違う」以上、関心をもつ必要もないと考えて、関連文献を読むことも長いことしなかった。1960 年代末から 70 年代初頭にかけての一連の社会運動の諸側面に関わる文献は結構たくさん読んできたが、連合赤軍に関するものはその枠外においてきた。

そういう感じで数十年を過ごすうちに、「まるで違うんだ」ということを殊更に強調すること自体、実は、内心で「どこかしら共通するものがあるのかもしれない」と薄々感じているからではないかという気がしてきて、遅ればせにぽつりぽつりと関連文献を読んだり、映画を見たりするようになった。早い時期のものとしては、高橋伴明監督の『光の雨』という映画（2001 年）を見た。この映画は、事件それ自体を直接描くというよりも、むしろ「とても描き出せない」という感覚を表出した作品であるようにみえた。登場人物のうち現代の若者たちはさかんに「分からない」と語っているし、数少ない年長者（監督自身の自己投影？）はかつて何かの運動に関与して逃亡した経験があるらしく、そのトラウマに悩まされて、過去に向かい合う企図を途中で放り出しまうという筋書きだった。あの事件について知りたいという関心からすれば肩透かしだが、よく分からないものについて分かったような顔をして語るよりは誠実な態度ではないかとも感じた。

その数年後、小熊英二『1968』（上下、新曜社、2009 年）が出た。これは長所・短所ともに大きな「ごった煮」的な大著だが、連合赤軍に関する部分はこの本のうちで相対的に優れた部分だと感じた（余談ながら、富田武氏の小熊批判のうち、この個所は誤解に基づいていて、実は小熊の連合赤軍論は富田氏の考えとそれほど隔たってはいない）。これに触発されて、いくつかの関連文献を読んだ。

さらにその後、若松孝二監督の『実録・連合赤軍あさま山荘への道』という映画を見た（製作は 2007-08 年のようだが、私が見たのは数年後の再映時）。この作品が映画としてどう評価されるべきか、また「実録」と銘打たれているが、どの程度史実に忠実なのかといった点について、私には判定能力がない。ただとにかく、見ているうちに強く引き込まれた。「もしあの場に自分がいたなら、どう考え、感じ、振る舞っただろうか」ということを考

えさせられ、元来は直接の接点がなく「われわれとはまるで違うんだ」と思っていた対象がいつのまにか強い感情移入の対象となってしまった（恥ずかしながら、途中で涙が止まらなくなった）。どうしてそうなのかということについて、理論的分析めいたことをしてできなくはないかもしれない。だが、それよりも先ず、この感覚を噛みしめることが先決だという気がする。今回、この件について、分かったような顔をして論評する気になれないのはそのためである。
（付記）。あの事件と私の直接的な意味での接点は皆無だが、間接的な縁は結構あった。私と同じ高校の卒業生で連合赤軍に関与した人は、知られている限りで３人いた（私の上級生・同学年・下級生が一人ずつ）。うち一人は、凄惨な事態が起きるよりも前に逮捕されて獄中にいたおかげで、その事態に関わることを免れ、出獄後に大学に復帰して、後に大学教授になった。残る二人は、リンチ事件で殺した側と殺された側に分かれた。殺した側の人は無期懲役刑を宣告され、今も服役中のようだ。この３人の誰とも私は親しくつきあう間柄ではなかったが、顔と名前は一応知っていた（高校時代の印象としては、殺した側の人は線の細いお坊ちゃん風に見え、殺された側の人は明るい健康そうな若者というイメージだった）。

20190503
聞きかじりの話。
ある説によると、欧米諸国では格差拡大をはじめとする社会問題深刻化の中で、極右が進出する一方で、それへの対抗として、かつて低かった社会主義へのシンパシーが向上しつつあるのに対し、ロシアおよび日本では格差拡大とか極右進出という点は共通するにもかかわらず、社会主義へのシンパシーが向上する兆しがほとんど見られないという。この説がどこまで当たっているかとか、その理由は何か、そこでいう「社会主義」とは何を意味するのかなどと考え出すと多数の難問が待ち受けており、迂闊に結論めいたことを言える話ではない。ただ、何となく「そういうこともあるかもしれない」という気がしないでもない。日本社会とロシア社会は相違点が大きく、共通性はあまり多くないが、かつて「社会主義」が大声で唱えられたことへの反撥と、近年における社会連帯精神の痩せ細りの激しさという点だけは共通しているかもしれない。

20190606
黒川創『鶴見俊輔伝』（新潮社、2018 年）という本を読んだ。
私は鶴見俊輔および『思想の科学』について、それほど丁寧に追ってきたわけではないが、それでも若い頃からずっと関心をいだいており、折りにふれていろんな文章を断片的に読みかじってきた。2004 年に出た鶴見の聞き書き『戦争が遺したもの』（聞き手は上野千鶴子と小熊英二、新曜社）に接してからは、彼のことがそれまでよりもよく分かってきた気がして、一段と関心が強まった。今回読んだ伝記の著者は子供時代から鶴見と接してきたという特異な経歴の持ち主で、ある時期以降は相当密着していたらしいから、伝記を書くにふさわしい位置にいたということになる。
この伝記では、祖父後藤新平、父鶴見祐輔、姉鶴見和子との屈折した関係、「不良少年」時代、未成年でのアメリカ生活、戦時下の帰国と軍属としての生活、『思想の科学』の創

刊と何度もの廃刊・復刊、60 年安保、ベ平連活動等々、波乱と曲折に富んでいながら一本筋が通っている長い人生が丁寧に追われている。約 550 頁という分量は決して「薄い本」とはいえないが、取り上げられている対象の複雑さ・豊富さからすれば、これでもまだ物足りないという気のするところもある。本書を出発点として、より深く切り込んだ鶴見研究が続くことを期待したい。
個々に興味深い記述は無数にあるが､それらを片っ端から取りあげることは到底できない。ただ一点、特に目を引いた個所として、いわゆる従軍慰安婦についての一見不用意とも見える言及がある。デリケートな問題であり、中途半端に触れると余計な誤解を招くおそれがあるので具体的引用は避けるが、著者は鶴見が「習熟した言葉の使い手」である以上、これは単なる筆の滑りではなく、あえて無防備とも見える言葉を使わずにはおれなかったのではないかと推測している（466-467 頁）。朴裕河の『帝国の慰安婦』をめぐる大論争ともあわせて、問題の深刻性を改めて痛感させられた。

20190610
アルカーディー・ドゥブノフ『何故ソ連は解体したか』（モスクワ、インディヴィディウム社、2019 年）という本が数日前に届いた。こういったタイトルの本は珍しくないし、タイトルを見ただけで内容の見当がつくような気がすることもある。しかし、まえがきと目次を見ると、この本には類書にない特色があるようだ。というのも、かつてソ連に属していた諸国（連邦構成共和国）で大統領・最高会議議長・首相などといった要職についていた政治家たちへの著者による聞き書きの集成だからである（該当する国の数は未承認国家を除いて全部で 15 だが、本書にはそのうちウズベキスタンを除く 14 ヶ国のトップリーダーたちの回顧談がおさめられている）。つまり、ソ連国家の解体が決せられようとしていた時期にそれぞれの構成共和国で枢要な地位にあった人たちによる内幕談が集められているわけである。もちろん、当事者だからといって「客観的真実」を語るとは限らず、事後的正当化や他者への責任転嫁の要素があっておかしくないが、そのような面を含めて、当事者たちの意識を知るための貴重な資料となるだろう。
本書はガイダル財団のプロジェクトによるものであり、また全体の冒頭におかれているのがブルブリス（当時ロシア共和国第 1 副首相）の聞き書きだということからも、ある種の偏りがあるのかもしれないという気もする（ブルブリスもガイダルも 1991 年末のクルーシャルな時期に、連邦国家解体＝ロシア一国資本主義路線推進の急先鋒だった）。そうした点は押さえておかねばならないが、とにかく各共和国のトップリーダーたちの回顧談を集めた本書はソ連国家解体過程について知るうえで重要な意味を持つだろう。私はつい最近ソ連国家の最期に関する著作の原稿を一通り書き終えたところだが、これから本書を読むなかで、いろんな補足や修正を思いつくのではないかとの予感がする。

20190618
（私は「ゲームの理論」というものをきちんと学んだことはなく、以下に書くのはド素人による厳密性を欠いた思いつきに過ぎない。理論に通じた人による建設的批評がいただけるなら大変ありがたい）。
①ある人が他者の振る舞いについて「ルールに則りながら勝ち負けを競うフェアプレイを

する人は少なく、むしろズルないしインチキをする人が多いだろう」という予測を持っているとする。その場合、自分だけフェアプレイをするなら「正直者は馬鹿を見る」という結果になるから、自分もズルをするのが得策（いわば「合理的選択」）となる。ところが、その人がそう振る舞うことは、それを観察する他の人たちに同様の予測と同様の振る舞いを広めることになり、そうしたことの累積的結果は、全社会的にフェアプレイの精神が掘り崩され、誰も彼もがズルをするということになりかねない。これは本来の意味での「囚人のディレンマ」とは異なるが、ある程度それに類似した性格をもつ問題――個々人の目先の短期的利害計算からすると有利であるはずの選択を皆がすると、社会全体として最悪の帰結になる――ではないか。

②「囚人のディレンマ」からの脱出法として「しっぺ返し戦略」というものがあると言われている。単純に言うと、誰かとプレイするに際して、一回目はとりあえず相手を信頼することにして、協調的な手を取る。相手もそれに応じてくれればそれで良し、そうでない場合には直ちに「しっぺ返し」をする。これは、常に他者を信頼するというほどお目出度い態度ではなく、合理的考慮に基づく戦略だが、多くの人々が繰り返しゲームをしているうちに自ずとこのような振る舞い方が広まっていく可能性が高く、その結果、人々は「囚人のディレンマ」から免れ、協調解が広まるとされる。これは確かに一理ある議論であるように見える。但し、これは高度に抽象化された議論だから、現実の社会において常にこの通りのことが実現するとは限らないだろう。特に重要なのは、「繰り返しゲーム」の仮定は必ずしも現実的でなく、一回限りのゲームでズルによるぼろもうけをして姿をくらますといった行動様式（いわば「食い逃げ」）がありうるという点である。そう考えるなら、「囚人のディレンマ」はある場合には回避可能だとしても、他の場合には回避可能でないということになるのではないか。そして①で挙げたような例は、本来の意味の「囚人のディレンマ」よりもずっと複雑であるだけに、その回避も一段と難しいような気がする。

③現代の日本――に限らず、世界の多くの国々――では、フェアプレイなどは馬鹿らしい、どんなズルないしルール違反（それがばれない限りにおいてだが）をしても目先の短期的金儲けに役立てばよい、選挙の集票に役立ちさえすればよい、テレビの視聴率が稼げればよい、SNS で人目を引くことができればよいといった発想が（どこまで公言するかは別として）相当程度広まっているように見える。そうした事態を指摘して、「何たること」と悲憤慷慨したり、ずるい方法でうまくやっている人たちを非難する言論も少なくない。だが、こうした事態は個々の当事者にとっては与えられた条件のもとでの「合理的な選択」の結果かもしれないと考えるなら、ただ単に慨嘆したり、ズルをする人たちを罵ったりするだけでは事態の打開にならないのではなかろうか。では、どうしたらよいのか。鮮やかな処方箋などありえないが、一つの考え方として、何人かの人たちが現にフェアプレイでゲームをして、協調的な関係（利得をめぐっては相争っているにしても、少なくとも「掟破り」の手を取ることはしないという相互了解）をつくっている事例の紹介がなにがしかの意味をもつかもしれない。①で見たように、ある人の行動様式は「他の人たちがどう振る舞うか」に関する予測に依存するが、こういう事例を広く紹介することはそうした予測に働きかけ、そのような行動様式を広める効果を持つかもしれない。

もちろん、それでうまくいくという保証は全くない。ただとにかく、ひたすらな慨嘆や他者非難だけでは片付かないということだけは確かではないか。